

人権なら

2017年4月1日

第76号

NPO なら人権情報センター

● ひと・まち・生き生き

総会・研究集会に向けて

NPO事務局会議で開催概要などを討議

NPOなら人権情報センターは3月13日、事務局会議を開催。2017年度の理事会および総会の開催や、「差別と人権」研究集会、水平社敬老会開催などの事業計画などを討議し、決定した。

第9回「差別と人権」研究集会については、第8回研究集会総括会議で出された論議を踏まえ、開催準備を進めていくことを確認。研究集会の概要は4月末までに確定することとした。

テーマとしては、昨年7月、神奈川県相模原市で起きた「津久井やまゆり園事件」を踏まえ、障害者や障害者施設と地域社会とのあり方についての論議を深め、考えていくこととした。

また、2年続けて議論してきた「子どもの貧困」問題について、今、必要とされることは官・民が連携した「地域における子育てネット」の構築であるとの観点から、さらに議論を深めていくこととした。

第9回「差別と人権」研究集会は9月2日開催

記念講演のテーマと講師、分散会のテーマ、実行委員会の開催時期など、開催準備に向けたタイムスケジュールなども討議。第9回「差別と人権」研究集会の開催日程は9月2日とした。

第1回理事会並びに総会は6月中旬をめどに、また、第38回水平社敬老会は10月14日に、それぞれ開催することとし、詳細については5月中旬に開く次回事務局会議で討議することを確認した。

また、第88回メーデー奈良地方大会が4月29日(土)午前10時から、奈良公園・県庁前広場で催されることから、支局に参加を呼びかけることとした。

「県障害者条例」を情宣

「ひまわりの家」メンバーらが近鉄生駒駅前

「奈良県・障害者条例」の情宣活動が3月15日、近鉄生駒駅前であった＝写真。三宅町・福祉法人「ひまわりの家」のメンバーらが参加した。この取り組みは奈良県障害者差別をなくす条例推進委員会の呼びかけで実施。県内の各ターミナルで行われてきている。

昨年7月26日に起きた「相模原やまゆり園事件」に衝撃を受けながらも、「声を上げていこう!」と続けられている。次回の情宣活動は4月26日午前10時半から、天理駅前である。参加ください。



「奈良県障害のある人もない人もともに暮らしやすい社会づくり条例」は2016年4月1日に施行された。

条例では、「何人も障害を理由とする差別はしてはならない」としている。「不利益な取り扱い」も禁止し



ている。「不利益」とは、合理的な理由もなく、障害を理由としてサービスの提供を拒否したり、提供にあたって場所や時間帯などを制限したり、障害のない人には付けていない条件を付けたりすること。また、「社会的障壁の除去」や、「合理的配慮」なども求めている。「配慮」とは障害のある人が困っている時、その人にあつた必要な工夫や手伝いをする事。県は分かりやすく解説した冊子を作成している。差別があつたばあいの相談・支援についても対応している。連絡は奈良県障害者相談窓口：Tel/Fax0742-27-8088まで。

高取町で居場所づくり

「フリースペース ゆいえ」が子どもらを対象に

元気に活動している「まちャポ」(写真・町屋のポニー)を訪ねた。3月は恒例の高取町「土佐町並み町家の雛めぐり」が催されていて、平日ながらも多くの人で賑わっていた。この行事は地域の「町おこし」として始まった。今年で11年になる。



「まちャポ」、町屋のポニーは「高取城」の城下町として栄えた古い町並みが残る一角にある。NPOならん人権情報センター理事の明見美代子さんが事業展開している。

昨年からはまった「居場所 フリースペースゆいえ」(写真・高取町丹生谷83-3)を明見さんに案内してもらった。



ここは「ふれあい乗馬センター・ポニーの里」(NPOポニーの里つくろう会)や、「ポニーの里ファーム」(農業生産法人有限会社)などにも近い。「不登校、ひきこもり、ニートの子ども、若者の居場所づくり」事業を行っている。裏に畑がある古い一軒家を改修し、拠点にして動き出している。

運営するのは「一般社団法人ならん人材育成協会」。県の「中間的就労サポート事業」の委託事業なども行っている。「人づくり・まちづくり」をテーマに、地域の資源や特性を生かした活動や就労、自立をめざすことを目的に、誰でも利用できる「居場所・スペース」としてつくられている。



昨年10月に橿原市であった「不登校・ひきこもり・ニート」の今とこれからを考えるトークイベントで話をした宇陀直紀さん(小学校から不登校。フリースクールを

経て高卒認定資格を取得し、大学に進学)が今、ここで活動している。宇陀さんとは、2月の釜ヶ崎・こどもの里「子ども夜回り」活動で一緒に行動した。

「ポニーの里ファーム」は、障がい者の乗馬セラピーを行う「ポニーの里」と、障がい者の就労支援を行う「ポニーの里をつくろう会」で2006年に設立した。



現在、<農業×福祉・薬草>の6次産業化(商品開発)に挑戦する新しい「農業ビジネス」に取り組み、注目されている。明見さんは「財政的に追われて苦しいが、やはり人が大切」と話した。

風化させない取り組みを確認

「藤井さんと考えるやまゆり園事件」を受けて

昨年12月18日、奈良市立中部公民館で開催された「藤井克徳さんと考える相模原やまゆり園事件・奈良」(=写真)の総括会議が1月18日、奈良市・「はぐくみセンター」であった。



会議では、藤井さんがドイツ取材を映像も使いながら報告し、「やまゆり園事件」は優生思想を背景にしたナチスのT4作戦(価値なき命の抹殺作戦)を彷彿させる、としたこと。知的障害者にも分かるように話し方を工夫されていたこと。日本の障害者政策の現状や、不寛容な社会への急速な傾斜などにも触れ、「社会的な戦い」の大切さを語り、非常に内容の濃い話だったことなどが感想として語られた。また、集会の参加者は約280人だった、と報告された。

今後も奈良の地で、「風化させない」継続した取り組みを続けていくことや、「事件1周年」での取り組みの実施を確認した。

「子ども夜回り」活動に参加

奈良からは「ひまわりの家」など9人が

釜ヶ崎・こどもの里が2月25日、「子ども夜回り」活動を実施した。奈良からは、「ひまわりの家」施設長の喜多学志さんやスタッフ、学童保育クラブの山本薫さんと、その連れ合い・息子、「一般社団法人eight」の藤本貴久さんら9人が参加。



この日の夜回りには、子ども

の里(写真)の子どもたちやスタッフの外に、個人や団体、東淀川区にある中島中学校22人や、未来子ども財団3人など、多くの人が参加した。

「学習会」が午後8時から、始まった。テーマは「釜ヶ崎のおっちゃんたちの仕事」。話をしてくれたのは、原口たけしさんと、わたなべたくやさん。どんな仕事をしてきたのかが、子どもたちが作った大きな絵を広げて説明。土木・雑役、型枠大工やとび、鉄筋工や左官、かじ屋や設備工、運転手(重機のオペレーター)や港湾での仕事などが詳しく紹介された。

淀屋橋・天神橋・心齋橋・難波などを回る

また、「えっとう・よまわりガイドブック」(資料)を使い、1970年～72年頃に越冬闘争や夏祭りが始まったことや、釜ヶ崎の様子、仕事や労働者の人数とともに、「白手帳」(雇用保険日雇労働被保険者手帳・2ヶ月で26日間以上働き、手帳に印紙を26枚以上貼付すると失業給付金の権利ができ、翌月から13日を上限に、アブレ<失業>時に、手当てが支給される)を闘い取ったことなどが説明された。

最後に、荘保共子さんが注意事項などを説明。みんなで歌「なんでよまわりするの」を歌い、グループごとに出発した。

この日は、難波ハッチ(野宿者3人)ー淀屋橋(同1

人)ー天神橋(同6人)ー本町・心齋橋(同15人)ー難波(同2人)を回った。出会った野宿者は計27人。野宿している人の中には、若い人もいて、いろいろと話ができた。

本町・心齋橋のアーケードでは、まだ人通りが多かった。野宿者に話を伺うと、酔っ払いに蹴られたり、ゴミを投げられたりしたこともある、と話してくれた。

日が変わり、午前12時半ごろに「こどもの里」に戻り、それぞれが感想を書いた。その後、グループごとに感じたことや、考えたことなどを報告し合った。

「こどもの里」を描いた映画

切れ目のない支援を続ける地域の居場所

映画「さとにきたらええやん」上映会と荘保共子さんの講演会が1月9日、奈良県文化会館であった。主催したのは「NPO法人青少年の自立を支える奈良の会」。自立支援ホーム「あらんの家」を運営している。

映画は大阪・西成で39年間続けてきた「こどもの里」の子どもたちと、その活動を描いたドキュメントだ。

こどもの里は「いつでも、だれでも行くことができる」地域の居場所で、放課後の学童、一時預かり、里親グループホーム、土曜日・日曜日・学校の長期休みの時の昼食の提供、夜の中高生のプログラム、子育て・子育ての相談など、ゼロ歳児から18歳までの地域の子どもたちに「切れ目のない支援」を続けている。



「こどもの里」代表の荘保さんは「命のある場所で、切れ目のない支援が大切なことと、「子どもたちが持つ力に驚かされる」と語った。心を揺さぶられる映画と話の内容だった。機会を見つけ、ぜひ多くの人に出会ってほしいと思った。

映画「みんなの学校」を上映

住民も支援する地域に開かれた学校

映画「みんなの学校」上映会が3月19日、川西町コスモスホールであった。主催は川西町・川西町LD研究会。この日午前には、映画「さとにきたらええやん」が上映された。「みんなの学校」は午後には上映された。関西放送企画担当・追川緑さんの話もあった。



ドキュメンタリー映画「みんなの学校」は2015年2月に劇場公開され、その後、各地で上映会が開催されている。

映画は大阪市住吉区にある公立小学校が舞台。周辺地域の小学校が定員を大きく膨れ上がったため、2006年に「大空小学校」が開校した。全校生200人程の小さな学校だ。「すべての子どもの学習権を保障する」を理念に、30人を超える特別支援の対象となる子どもたちも同じ教室で学ぶ。「地域に開かれた学校」として、住民や学生ボランティアだけでなく、保護者らの

編集後記 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

森友問題が連日、報道される。疑惑まみれで、人々の関心も高い。国有地の格安払い下げ、異例の学校設置認可、安倍首相名を使った寄付金集め、同夫人の名誉校長就任、財務省、国交省などによる便宜の計らいなど。「妻から森友学園の教育に対する熱意は素晴らしいと聞いている」と首相。この安倍案件は超スピードで事が運んだ。「教育勅語」を信奉する極右の人たちが愛国教育推進校「瑞穂の国記念小学院」の設立に動いた。人権教育、民主教育を否定し、軍国主義、国家主義教育を実現したいがために、だ。子どもたちを洗脳する歪んだ教育は国の将来をも誤らせる。

支援も積極的に受け入れている。

すべての子どもに居場所がある学校を

「すべての子どもに居場所がある学校を作りたい」。校長に就任した木村泰子さんの思いだ。「自分がされて嫌なことは人にしない・言わない」。たった一つのルール・約束がある。子どもたちはこの約束を破ると“やり直す”ために、やり直しの部屋「校長室」にやってくる。

この映像は興味深い。「世界一難しいリレー」(運動会の競技)も見ものだ。「どの子どもにとっても、安心して居られる場所としての学校」を作りたいとの活動が続く。映画に登場する、セイシロウ、カズキ、マアちゃん、ユウちゃん、マサキ、ユヅキらの多くの子どもたちをはじめ、教師やボランティア、親たちの「戸惑い」「揺れ」が、その姿や表情とともに映し出されている。

関西テレビの追川緑さんは「ともに学ぶ実践(教育)の感度は鈍い」と言う。「子どもを分けない。そこからしか始まらない。分けたら終わり。すべての子どもも安心できる場にはならない」「どういう子が、どういう理由で分けられるのか。子どもたちは鋭く見抜く」と話す。

ぜひ観ていただきたい映画だ。

■柳本飛行場跡の説明板再設置を求めて

天理・柳本飛行場跡の説明板再設置実現に向けた市民集会在4月7日(金)午後6時から、天理市かがやきプラザ(市文化会館南30分)で開かれる。突然の撤去から3年。歴史の事実と向き合う中でこそ、戦争のない平和な社会は実現できる。パネルディスカッション&トーク。パネラーは吉田智弥さんほか。問い合わせは090-8234-0077(事務局)。

ニュースレター「人権なら」

発行:NPO法人なら人権情報センター
〒636-0223
奈良県磯城郡田原本町鍵301-1
TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833
E-mail: info@nponara.or.jp
http://www.nponara.or.jp/